

前	奏	黙想	祈	禱	
招	詞	イザヤ書 43:18~19	讃	美	歌 239
讃	美	歌 26	献	金	
祈	禱	こころをかたむけ	讃	詠	547
信仰告白	使徒信条	566	黙	禱	
聖	書	エレミヤ書 20:7~9	主の祈り		564
		マタイによる福音書 4:18~22	頌	栄	544
讃	美	歌 286	祝	禱	
説	教	『主に呼びかけられた漁師は』	後	奏	

イエスは湖のほとりで、ペトロとアンデレの兄弟漁師に「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう(マタイ4:19)」と言った。すると「二人はすぐに網を捨てて従った(4:20)」。それから次にヤコブとヨハネの兄弟漁師にも呼びかけ、「この二人もすぐに、舟と父親を残してイエスに従った(4:22)」。

漁師にとっての商売道具である網や舟を手放し、そして絶対的な「父親」に背いてイエスに従う。事の始まりイエスが彼らを「御覧になった(4:18,21)」こと。そして簡潔に呼びかけた。マインドコントロールでもあるまいに、兄弟漁師らの逡巡や葛藤はどうだったのか。「考えさせて下さい」とか「家族に相談してから」となるのが常識的な対応だ。そして父親の「ワジャ、許さんゾ」とか、母親の「おまえ、考え直しておくれヨ」といった家族内の危機と緊張も普通にあるはずだ。若い漁師たちの揺れ動く気持ちは何も記されていない。だが主に捕えられた預言者エレミヤがその心を教えてくれる。

「主よ、あなたがわたしを惑わし、わたしは惑わされて、あなたに捕えられました(エレミヤ20:7)」。イエスは兄弟漁師に「(魚ではなく)人間をとる漁師にしよう(マタイ4:19)」と言ったが、彼らがじっと見つめられた時(4:18,21)、すでに主に「捕えられていた(エレミヤ20:7)」。兄弟漁師の決断は、常識的に見れば「一日中、笑い者にされる(2:7)」ような馬鹿げたことだろう。「主の言葉ゆえに、一日中、恥とそしりを受ける(20:8)」ことかもしれない。だが主の言葉は、常識に縛られた人間の「牢獄」を打ち破る。

「主の名を口にすまい、もうその名によって語るまいと思っても、主の言葉はわたしの心の中、骨の中に閉じ込められて、火のように燃え上がります。押さえつけておこうとして、わたしは疲れはてました。わたしの負けです(20:9)」。そうなのだ。主の言葉は、私たちの心の中、骨の中から燃え上がって隠れていた真の希望を露わにする。見栄や比較、幻想や劣等感でつくられた表層の願いではない。主の言葉は「骨の中(最奥)」にある私が存在する根拠、すなわち創造の真実へ私を解き放つ。

預言者のように「燃え上がる(20:9)」ようでなくとも、心や骨の中に「火が灯される」その時、キリストの招きを聞き逃してはいけない。人間の時間は限られているし、キリストに従うための備えもまるで必要ないからだ。「帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である(マタイ10:9~10)」。

福音の担い手は「主の言葉」に通じた祭司や律法学者が適していそうだが、彼らではなかった。また羊飼いや数の多い農民でもなかった。イスラームの創始者ムハンマドは商人出身で、商人は政治や土地に拘束されずどこへでも旅をする一番の自由人であった。ところがそんな自由商人でもなかった。イエス御自身や少し後のパウロは職人だが、どういうわけか福音の最初の担い手は漁師であった。

民俗学者宮本常一は小文「海ゆかば」で漁師の興味深い冒険譚を聞き書いている。農民出身の宮本は「漁師の野放図さに心うたれ」、「海の男たちには農民には見られぬ無鉄砲さと可能性を信ずる心がつよかった」と実感した。イエスの最初の弟子は漁師だった。福音宣教を担う教会は、ペトロらのような「無鉄砲な可能性」を心の底に据えておきたい。その時には四の五の言わず網でも舟でも捨てる。

キリスト弟子には初めからいろいろな者がいた 徴税人や奴隷 職人や農民 異邦人兵士や牢屋番
 いったう最初の弟子は漁師だった 無鉄砲さと可能性を信じる器だったから それが基層となった
 2/12(水)12:00~2:00 エステル会。2/15(土)1:30~3:00 メディカルカフェ。今年の教会総会は4/27
 の礼拝後です。牧師の動き:2/11(火祝)山梨ダルクセミナー、2/12(水)山梨YMCAで聖書のおはなし。

礼拝堂・集会所の住所: 408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ: 408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

eメールは komechan.olive@gmail.com HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。